

ブラジル行

金沢大学学長 豊田文一

はじめに

北半球は時々訪れたことはあるが、南半球はインドネシアを除いて知らない。

昭和2年(1927)7月21日は当時県立福野農学校教諭松沢謙二氏を団長として、この新天地の開拓にサントス港に上陸した日である。これは富山県における集団移住の記録としては矯矢とすべきものである。それより丁度50年、正に半世紀の苦斗をねぎろう意味で、富山県において訪問団が結成され、一行120名はブラジルに向ったのである。

私はかねてブラジルの開拓地の事情について記録などから、一応頭のなかに想像はしていたが、実際この眼で確かめたいのが多年の念願で、今まで見てきたヨーロッパ、アメリカ東南アジア、近東、インドの農村の様相とのちがいなども調べてみたかったのと、むこうの教育制度、とくに大学の模様も視察の目的でもあった。

とにかく幸に一行のうちに参加することができ、数日間という短時日であったが、未知の人達と親しく語り合い、また知己をえたことは、思い出に残る一駒ともいえる。

ブラジルという国

日本からみれば地球の裏側、サンパウロは丁度南回帰線が通っているから、ここから地球の中心にボーリングすれば台湾の中央、つまり北回帰線の通っている所に抜ける。春夏秋冬は逆だが、この国の北端に赤道が走っているの、熱帯から亜熱帯である。しかし何

分にも北から南まで4,300キロ、日本に例えれば、北海道の北端からフィリッピンの南端まで、面積は8,511,965平方キロ、日本の23倍、人口は日本とほぼ等しく1億14万人、国土の80%は耕作可能(日本は18%)、食糧から考えると将来7億の人口が養えるという。農業資源ばかりでなく、鉱物資源も、鉄鉱石は世界最大、マンガン、ボーキサイト、錫、亜鉛その他も莫大な量が埋蔵されている。ただ石油に関しては現在徴々たるもので、目下試掘ということだが、大きな期待がもてる。ちなみに石油は輸入に頼っているの、現在ガソリン1立140円で日本よりやや高い。工業も活発で外資の導入によって支えられているが、国際的に工業国としての舞台に飛躍する日も近いと思われる。それなればこそ「未来の国」、「21世紀の国」として人口に膾炙される所以でもあろう。

ブラジル移民

移民という言葉が日系の人達は嫌う。移民は棄民、賤民に通ずるニュアンスがある。だから向うの会合などで、移民という言葉を使うとクレームがつく。だから私どもは務めて移住者というようにした。しかしこの文章のなかに移民という語がでるかも知れないので御了承を乞う。

さて何故日本人がブラジルに移住したか。その前にこの歴史的背景をみることにする。日本人の海外移住は鎌倉時代から始まったといわれる。鎌倉時代より徳川幕府の成立まで

人口の流れは北海道に向っていた。それより遅れてもう一つの流れは東南アジア及びヨーロッパに及んだといわれる。ある記録によると当時のキリシタン藩主の一部では、領地の住民を主としてポルトガルに奴隷として売っていた。しかしその数は余り多くなかったようである。東南アジアは全域にみられ、ルソンやシヤム（現在のタイ）では山田長政の築いた日本人街は有名であり、またからゆきさんで知られるジャバも思い出せる。しかし徳川幕府の鎖国政策、また松前藩の和人制限によって海外との交通杜絶し、国外への移住はとだえた。明治元年（1868）徳川幕府の崩壊によつて政治体制の激変は北海道開発の推進に眼がむけられ政府も積極的に援助することとなる。他方太平洋の彼方、アメリカ大陸では西部の開発と大陸横断鉄道の工事が進められて新大陸の労働力の供給にせまられる。それで中国から苦力といわれる奴隷労働の代替が送られ、かつ当時独立国だったハワイも甘蔗プランテーション化をいそぎ労働力を要求した。そのため明治元年、いわゆる元年組といわれる 153人が大阪からハワイに渡航した。賃金は当時の日本の単純労働に比較して4倍も高いもので、志願者は極めて多かった。しかもハワイはアメリカに併合され、ハワイにおける日本人はより高い賃金の西部に移動してゆく。彼等の多くは金を貯えて帰国し、故郷で土地を買い、家を建てるのが目的でもあった。もちろんその頃は朝鮮、満州、台湾、さらに南方へも流出してゆく。当時の日本の状況は農村の人口が飽和点に達し、そのはけ口を海外に求めざるをえなかった。ところがここで衝撃的な事件が起った。それはアメリカの西部の労働組合と利害が伯仲し、1907年移民が近親者の呼びよせ、再渡航者、アメリカ国内で農業の既得権をもつもの以外移民の全面停止となった。ここで触れておきたいのは移民会社という移民の仲買であり、アメリカ、ハワイへの労働者の送り込みを主として

この会社がやっていた。この事態で移民会社も方向を変換せざるをえない破目に陥った。たまたまブラジル、サンパウロ州のコーヒー園の労働不足とアメリカの入国停止のあがきが、この会社をして眼をブラジルに向けさせた。しかしブラジルの労賃は1円20銭～1円50銭で日本と同じ、ハワイ、アメリカの5分の1以下で労働条件が悪く、有効に使用できる土地は大地主の大農園で、いくら働いても好条件の土地を求め、社会的に上昇する機会がなかった。だが反面、このような悪条件でも、本国は人口飽和、また北海道も開拓の余地がなくなり、海外に求めるとするならばブラジルは開かれた門といわざるをえない。一方ブラジルでは1897年頃からコーヒーの生産過剰で価格暴落し、賃金不払も続出し、その他労働力の大きな供給源であったイタリアからの移民も本国の指示によって停止する位であった。所が1920年頃から第1次大戦後の不況、それにつけて日本国内の資本も労働力も価値を失い始め恐慌の一途を辿りつつあった。この頃になると日本移民もブラジルで独立農可能の見通しがたち、かつ都市発達に伴い、その周辺からの小商品農家の自立経営も十分維持できる傾向が強くなる。またブラジルではコーヒー値の下落を防ぐため過剰生産物政府買上げ政策を実施し、小規模農業の自立、さらにアマゾン地域の開発に乗り出している。日本政府は1924年（大正13年）以来ブラジル移民の旅費全額負担し、移住の促進をはかったわけである。これより先1905年杉村公使の「南米ブラジルサンパウロ州移民状況視察書」の1部を転載すれば「今や伊国移民禁止のためサンパウロ州は移民不足を感ずること切にして、官民は一般労働者を歓迎する時機なるをもって、本邦移民の禁止さるる米国に行くよりも、寧ろ当州に来ること我移民一般のため便利とすところなるべし。その距離米国に比すれば、その旅費稍多きも、幸にしてサンパウロ州政府はその渡航費の全部又は一部

を償給するが故に、これ又苦慮するに足らず、我が移民のため当サンパウロ州の如きは実に天与の楽郷福土にあらざるか云々」（通商彙纂第69号）。このことは1908年（明治41年）笠戸丸により第1回移民168家族779名の集団移住となるきっかけである。この頃は神戸—シンガポール—印度洋—ケープタウン—大西洋を経て、約50日の行程で6月18日サントス港に上陸している。私どもの26時間の行程に比すれば、船室の灼熱にさいなまれた苦惱が偲ばれる。すなわち今年移住70周年にあたり、盛大な記念式典が催されると聞く。極めて意義あることと思われる。さて富山県ではこれより遅れること20年、1927年（昭和2年）に始まる。記録によれば当時の白上祐吉知事によって海外発展運動が提唱され、県内有志とともに海外移民協会が設立され、先に述べたように同年6月4日サントス丸に乗船、壮途につき7月21日サントス港に上陸、第3アリアンサ附近にてテントを張り、人跡未踏の原始林に開拓の斧を響かせたのである。以来50星霜、富山県人の斗志と忍耐は今日の姿を生み出したものであろう。私どもは当時を偲ぶよすがもないが、お会いした一世とよばれる人々の風貌に刻みこまれた苦節の年輪にただただ頭の下る思いを禁じえない。

オーロラを見る

小松より松島上空を経て太平洋上アンカレジに飛ぶ。アンカレジにて給油、深更離陸。約30分、機内のアナウンスはオーロラの出現を伝える。極地の奇現象、窓外に眼をやる。恐らく地平線上からであろう、銀白色の厚い帯が広がったよう。その色が黄、緑、時に青などただようなかに変化を混える。その帯の上に数本の炎のような柱が立つ。左右に揺れ、あるいは高く、あるいは低く、流動的にその姿を変える。全くの暗夜、そのなかの奇現象、始めてみた私には神秘的、幼想的の思いをよぎらせる。オーロラなる言葉は元来ローマの神話、曙（あけぼの）の女神 Aurora の英語読

みである。ものの本には「高緯度地方の上空に現われる大気の発光現象で、太陽面爆発によって生じた帯電微粒子流が地球上の磁気空洞中に浸入し、電離層中の空気分子、原子を刺激して発光させるもの。必ず磁気あらしに伴って出現する。高緯度地方の地上100~400キロの高さに達する」と。しかしその説明は今なお不完全のものようで、日本南極地域観測隊、また1月に日本で打ち上げられた気象人工衛星も、その現象の機構を究めんとしている。

とにかく偶然とはいえ、オーロラをこの眼で確めたことは、それが一瞬であっても私の一生の思い出に残る幸運であったといえよう。夜が明けると5大湖上空、遙かにナイヤガラ飛瀑がかすみ、ここバッファロー市の近郊、曾遊の地、ここに多くの知己、友人もおり一入なつかしさを覚える。ニューヨーク、カリブ海のサンファンを経て、午前2時過ぎサンパウロ、ピラコポス国際空港着。所要時間28時間。

サンパウロ

街に入るとほのかなコーヒーの香が鼻をかすめる。深夜というのにバスが走り廻っている。人通りはまばらである。早朝に工場へ出かける人か、あるいはその帰りか私には判じかねる。しかもコーヒーショップがあかりをともし店を開き、そこには軽食をしている人達であろうか、人影は多い。私も色々の国を廻ってみたが、夜間の出歩きはめったに見られない。治安がいいのだろうか、一種の安緒に似た気分になる。

標高約800米の高原に発達した街で、南回帰線が通っているので亜熱帯だが、気候は温暖といえる。もともと良湾に恵まれたサントスの背後地にあり、古来この港に通ずるサンパウロが交通の至便のため発展してきた。日本移住者もサントスからサンパウロへ、サンパウロから開拓地への経路をとっている。この農業開拓はポルトガル人もこの経路を通っ

て、コーヒー農場、甘蔗農場を開拓している。在ブラジルの日系人口75万人、そのうち25万人はサンパウロ州に居住しているといわれる。市の総人口 800万人（サンパウロ州 1,000万人）に対すれば比率は低いが、最近の企業進出で日系の商業も活気を呈している。

日本人街が軒を並べる通りに「お茶の水橋」というのがある。赤い鳥居の下をくぐって車は走る。街燈は鈴蘭型は通り相場だが、ここでは岐阜提灯型が連らなっている。日本料亭が軒を連ね、一杯呑み屋風のものまである。店を覗いてみると日本の銘柄の酒が並んでいる。話を聞くと防腐剤の混入率が高く、決しておいしくないとのこと。現地産の日本酒「桜きりん」というのがある。恐らくキリンビールの系統でもあろう。酒の味のわからない私でも余りうまくない。私は海外にでても日本食には郷愁をもたないが、ここで開催された富山県人会との懇親会では、郷土色豊かな料理が並べられてあって、移住された人達の心の暖かさをしみじみ味った。

あるアメリカの友人が東京へ来て、ここはアメリカの都市と違わないではないか。違っているのは看板の字が日本語で書いてあるだけだと言ったことが、いつも私の頭の中に残



日本式料亭（おすし）

っている。サンパウロの街並も近代都市の風格で、南欧風でバリの街並と似ている。その間に超高層ビルが樹立している。ただ欧米で

は何処でもみられる緑に包まれた公園風の広場のあるのが羨しい。

ここは取り立てて風光明媚という所はない。全くの商工業都市であり、およそ観光というイメージはない。その点リオデジャネイロと異なる。一日割いてサントスに出向いた。こ



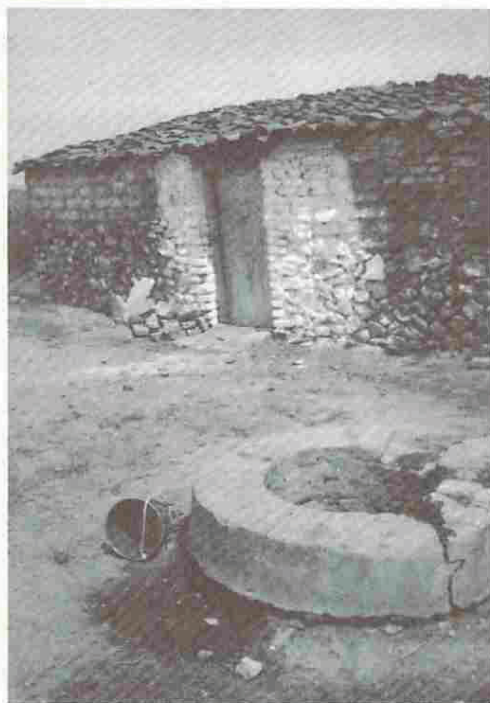
サンパウロ市街

こは良港であり、ブラジル貿易の中心ともいえる。港は港として色々の国籍の船がひしめいているが、一方黒砂の海岸はリオと同様一年中海水浴ができる。ビキニの豊満な女性に見とれる余裕もなかったが、この海岸の美しさは日本ではみられない。

私はここを見たかったのは、50年前富山県移住者が最初にブラジルの地に足をつけた所だったからである。成る程海岸通りのホテルは豪華だったが、ダウンタウンのスラム街も見た。崖ぶちに今にも崩れ落ちそうな所に小さなトタンぶきの小屋がひしめいている。大雨でも降れば一たまりもない。ここでも見られ

るのは貧富の差の著しいことである。このことは、その後メキシコを廻ったとき、テオティワ坎のピラミッド附近の農家をみたとき痛感した。家の壁はゴロゴロしている石を集めて漆喰で固め、屋根はトタンか草ぶき、先ず牛か馬の小屋のようなもの、井戸はあるにはあったが、ポリバケツでくみ上げている。社会保障に力を入れているとはいうものの国民全般の生活に及ぶのは程遠い憾がある。

サンパウロの市街については取り立てるものがないが、ただ一つ印象に刻みつけられたものがある。10月8日(土)、10月9日(日)のことである。ホテルの周辺に樹木でおおわれた広



メキシコの農家

場がある。夕方頃から続々人が集まってくる。そのうちに歓声が続き爆竹が打ち上げられる。深夜まで止まない。迷惑はこちらで、睡眠が妨げられる。各部屋から文句がでるが、場所はホテル外、泣寝入というわけである。よく聞いてみると翌9日はブラジル最大の行事であるフットボール試合があり、サンパウロ州

の代表決定戦で、サンパウロ市と他の都市で競われ、20数年間全国選手権には出場していないが、今年こそこれに勝って全国で覇を争わせたいの一念で、市民が総力をあげて応援する。その前夜祭で全市この状態らしい。

フットボールの王者ペレーはサントス出身、わが国のサッカーチームにも助っ人選手として、かなりかかえこんでいるのは御承知のことと思う。何分にもブラジルの国技である。翌日街路の風景もみものである。私はこの日、50キロ程離れた農村の視察で車を走らせる。市内を走る車、市外から入りこむ車は列をなす。どの車も旗をかざして走りまくる。しかもこの旗の模様は、サンパウロ市チームのシンボルフラッグである。南欧は情熱の国といわれるが、この血をひくブラジルも情熱というより狂熱の国という方があたるかも知れない。今年のリオのカーニバルで例年のことながら数十名の死者が出たと報ぜられているが、どうして死者まで出るのか私どもには判らない。熱狂と情熱、目のあたりにみたものでないと想像もつかないだろう。「ブラジルでサッカーを禁止すると革命が起る」と在住の或る人が私に教えてくれた。

私は短時間であったがテレビを見た。競技場は15万人も収容できる。最大のもの18万人収容できるそうである。先ずサンパウロ市チームが1点を入れる。これと同時に市内の各所から大花火があげられ、上空にこだまする。家庭ではテレビにしがみつき、街の人通りはまばら。しかし遺憾。その後3点入れられて、市民の希望空しく敗退。

ただここで付け加えたいのは、「サンパウロ市チームが勝利を取れば、翌10日は公務員全員に休暇を与える」とは市長の約束である。それが実現できなかったということも一つの印象であり、試合当日の夜は安眠できたのも私どもにとって幸であった。

私どもはブラジリヤ、リオ・デ・ジャネイロ、ブエノスアイレス、ラブラタ(学園都市)、メ

キシコ・シテイというような大都市を訪ねたが、都会そのものの様相については案内記にあることで割愛する。このうちブラジリヤは無から有の都市建設で世界でも範とすべき存在で、この都市美は私の頭の中にいつまでも残るだろう。

ブラジルができるまで

もともとラテンアメリカには原住民インディオが3万5千年から2万年前にシベリヤから当時陸続きであったベーリング海峡を経てアメリカ大陸に渡ったものらしい。人種的にはインディオはモンゴル系統に類似している。9千年前には南米大陸の南端まで達したともいわれる。これらの原住民も紀元前3000年頃から階級社会を形成し、原始的農業、狩猟、採集が行われ、アステカ帝国やインカ帝国のような中央集権化した国家さえ出現している。発掘される遺跡よりテオティワカン文明（メキシコ）、マヤ文明（中央アンデス）などの偉大さがみられる。それらの原住民はその後にも独自の集団で生活を享受していたものである。

所がこの楽土に衝撃的波乱を起したのは、ヨーロッパ人の新大陸の発見である。1492年コロンブスがアジアに到達する目的で大西洋を航行したが、その行きつく所は西インド諸島のサンサルバドル島の発見となった。これがヨーロッパ諸国のアメリカ大陸への足がかりとなる。しかしこれより先新大陸への到達は14世紀北欧のバイキングによってなされているが、当時何らの社会的衝撃をも与えなかった。だから継続的な植民のいとぐちを作ったのは、何とんでもなくコロンブスの功績に帰すべきである。

ブラジルはインド遠征の途中にあったポルトガルのペドロ・アルバレス・カブラルによって1500年4月22日発見されているが、そこには求められていた香料、金、銀がなかったので放置された。その時ヨーロッパで使用される赤色染料をとるブラジル樹(Pau Brazil)が多く産出したのでブラジルの国と呼ばれ、

これが次第にブラジルという国名になった。その後この地にヨーロッパの各地よりの進出のきざしがあり、1530年マルチン・クアンソを派遣し、新領土の防衛と植民を開始したのである。植民は先ず甘蔗産業から始められ、次いで牧畜で、これを原住民のインディオ、それにアフリカから移入した黒人奴隷を駆使して開拓を始め、甘蔗産業はサンパウロ周辺、牧畜は漸次奥地へ進め、それと共に領土の拡張を行った。その後ヨーロッパ、フランス、オランダ、イギリスと領土に対する角逐が起ったが、1750年マドリ一条約により現境界線が定められた。このようにしてポルトガルは開発を進め1500～1800年までブラジルから本国ポルトガルに送られた金は1,000トンに達するといわれ、世界第一の産金国でもあった。この巨大な富は東洋からの植民地を失い追い出されたポルトガルはここに貿易においても、産業においても独占的地位を確立し、遂にポルトガル王朝のブラジル移転も起った。1815年ブラジルは植民地より王国に昇格し、この地に政治的、経済的、文化的に大きな刺激を与えた。それとともにブラジル人は自由、進歩、独立の喜びを知り、これが独立の端緒となる。この動きに対しポルトガルは本国の隆盛を計るため再び植民地化の圧迫を加えてきた。このようなすう勢のなかで国王ドン・ジョアン六世は皇太子ドン・ペドロを摂政として本国へ帰還する。自由と繁栄を享受したブラジル人はジョゼ・ボンファシオ・デ・アンドラータ・イ・シルバを盟主として独立の戦を進め、1822年9月7日ドン・ペドロ一世を皇帝として独立を宣言した。しかしドン・ペドロ一世はポルトガル人を要職に多数登用したので国民の反感をかい、1831年当時5才のドン・ペドロ二世に譲位してポルトガルに帰る。

ブラジルでその頃最も重大なものは奴隷であり、これがなければ産業が成り立たない。所でヨーロッパ各国が西インド諸島を領有し甘蔗工業の発展をめざしたが、ブラジルが奴

隷輸入の大半を占めたため、労働力不足に悩むこれらの国から強圧が加えられた。このため1871年奴隷の新生児、1885年60歳以上の奴隷解放、それに引き続き1888年摂政イサベル王女により全奴隷の解放が宣せられた。このことは世論の強い要望であったものの、ブラジル経済の支柱であった農村の農園主から労働力を奪う結果となり、帝政の最後の支柱であった地主階級の没落をみるに至った。1889年陸軍の長老デオドロ元師を首領とする無血革命によって帝政が崩壊し、王族は家族とともにヨーロッパへ亡命した。1890年憲法制定され立憲君主政体より連邦共和政体に移り、過度の中央集権体制より過度の地方分権体制となった。また初代大統領としてデオドロ元師が選ばれた。これが今日のブラジル成立の基礎であるがその後革命、クーデターを繰り返して、常に軍に政治の主導性を握られ、政情の不安定に終始している。しかも大統領令法というものは国家保全、財政事項のみならず、税制、行政機構の新設、公務員給与の決定権をもち、法律提出権限も所有している。わが国では考えられない独裁制といわねばならない。私はブラジルで吉田駐伯大使と日系の国会議員デイオコ・ノムラ氏に案内されて国会の参観、上院議長、下院議長などとの面会の機会をえ、院内をまわって本会議場をみた。この議場は議長席はやや高い所にあるが、他は平場である。そこでノムラ氏に大臣が何処に坐るのかと尋ねたところ、その答は本会議には大臣が出席しない。国会の審議はすべて委員会で決定し、本会議では賛成するだけだから大臣の出席は要しない。質疑もないとのことである。もし委員会で大統領の意に反した結論になれば国会は停止、大統領の権限で総ての施政を行うこととなる。国会の勢力分野は現在の詳しいことは聞きもらったが、1973年の資料によれば与党は上院66名中59名、下院307名中220名、この与党勢力に支えられて1974年軍事革命政権第4代大統領と

してエルネスト・ガイゼル将軍が就任となったわけである。

思うに共産圏はとにかく、いわゆる開発途上国では私のみた限りではほとんど軍事独裁政権で、恐らく強力な力で押し進めねば国の発展は望めないもののように痛感した。

生 活

とにかくインフレは甚だしい。1976年は46%、1977年は42%、それでも落ちつきつつあるという。ちなみに私の廻ったアルゼンチンでは103%である。この原因はぼう大な輸入超過がもたらしたものだといっている。それで現政権では100%、200%の重関税をかけた輸入防止に努めている。あれだけ諸外国で問題となっている日本製自動車は先ず見ないといってよい。街で見る車の大半はフォルクスワーゲンである。しかもこの車は西ドイツ資本による国内産で、サンパウロ近郊でこの工場をみたがその巨大なことに驚く。日系の工場も合併も含め400社といわれる。私の聞いたある企業での話だが、その利潤は日本へ送れない。従ってその利潤は設備投資にあてるより仕方がないそうである。

さてこのインフレに対して生活はどうか。私が方々で会った人達は比較的余裕のあるもので、一般庶民のなかに入りこむ機会はなかった。ただ日系の造園業、花卉栽培、養鶏業の人々を訪ねて、その実態をみて廻った。この人達はすでに基盤を築き多数の使用人を使って仕事をやらせている。私は問うた。「この広い地域の農業や仕事を誰がやるのか、日系人がいるのか」これに対して「外国人にやらせる。日系は少し金がたまると自立して永続きはしない。それでやとわない」と。この外国人という言葉は私ならずとも奇妙に感ずるが、日本人以外は自分自身日本を離れてブラジルに居ても、他の人間は外国人という。一世の人達の大部分は未だ日本国籍もっておりいわゆる二重国籍で選挙権はない。しかし二世からは顔貌は日本人でも正にブラジル人

である。なおこの外国人は主としてイタリア人、アフリカから買われてきた黒人奴隷や原住民たるインディオの血の流れている人達である。ここの賃金は1日1,000円の由、なおブラジルで定められた最低賃金は月額2万3千円。石川県のそれは日額2,280円、1ヵ月25日可稼として5万6千円である。しかし物価はインフレにあおられているというものの牛肉1キロ400円、米は日本の $\frac{3}{5}$ ~ $\frac{1}{4}$ など生活必需品は極めて安い。1日1,000円で生活しうるのである。この使用人の部屋をみせてもらったが、土間の6畳ばかりの部屋2つに台所、それも最近まで薪を使っていたとのことで部屋は黒くすすけている。農業を主体とした日系の人達も開拓当時恐らくこのような状態から今日を作りあげたものであろう。しかし私の訪れた家は近代的な文化的生活を享受しているように思われた。



農園の使用人の住居

しかしブラジルの発展、現在の大都市、ことに人口1,000万をよゆうするサンパウロの背景にはそれらの食糧生産に対する日本人の貢献を忘れてはならない。日本人がブラジルに移住したとき日本式農業と全く異った形態に直面したため新しい農業の性格をさとり技術的開拓をなし、このことは現在のブラジルのパイオニヤーともいえよう。日系人に対し「日本人は勤勉である」「日本人は忍耐が強い」というこの国の評価、このことはすなわち経

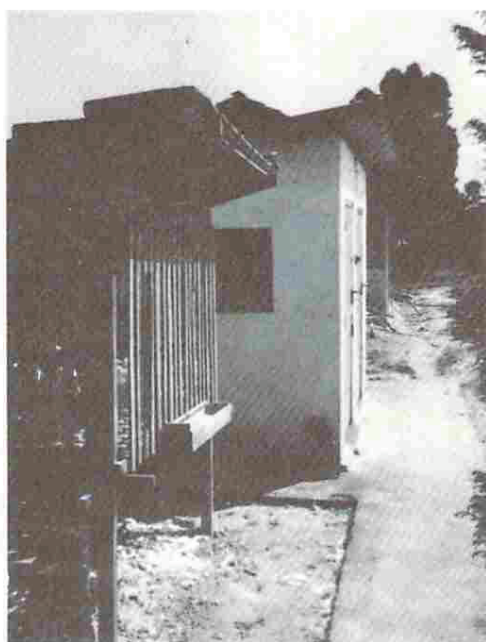
済的な成功、社会的地位の向上をもたらしている。日系人口は全人口の0.7%にすぎないが、国会議員7名、大臣1名を出していることもその裏付けとなる。また日本人の社会的地位の上昇は移住した人達が集団を形成し、土地の獲得をめざす、そして家族全員農業に従事する。また近接集団との相互扶助の精神と協力、家父長的習慣による集団の強化があげられる。一方都市近郊の工業化に伴い、強力な協同組合を背景として、それをまかなう食品農業の進出ということがブラジル全体としての農業上のけん引車たりうる。事実、1960年無人の原野のなかに出現した首都ブラジリヤの建設に当り、将来100万ともいわれるその住民の食糧需給のため、政府は日系農業者をその周辺に移住させたとも聞く。このように日系の人達はブラジル農業と切っても切れない関係にある。地理統計庁の統計によると農業上での日系人の生産は全生産の紅茶100%、胡椒100%、落花生39%、薄荷油91%、じゃがいも27%、綿花11%という数字があがっている。土地に対する執着は日本人では特に強く、鉄道建設によりその沿線での開発で、土地殖民会社が長期年賦、その他の有利な条件で農家に売り出したことも日系人農業者の絶好の機会となったことも否めない。

ただインフレの影響と政府の生活上の必需品価格の統制で、生産コストが償わないとなげいている。私の訪ねた養鶏業をやっている宮井氏の先ず口にしたことは国会議員に農業関係の人は極めて少く、その実態を国会の場で反映してもらえない。工業製品は材料費、人件費、設備費その他を勘案して価格を決定しているが、農業生産のそれは極めてあいまいである。成る程農業に対して国の融資はある。政府資金は年15%である。しかし市中金利は定期で40%であるため、余裕のあるものなかにはサヤ稼ぎをするものもいると嘆く。農業機械は日本の3倍もするし、農産物は安いとばかり。農耕には未だ馬を使っている所も

あるのか、蹄鉄の鍛冶屋もまま見受けられる。私は奥地を見聞する機会がなかったので、本当の苦労を見ることができなかった。

生活面を服装でみると西欧と変らない。家屋では都会地は南欧のスペイン、ポルトガル風で中世紀建築のたたずまいがするが、メインストリートはアメリカ式の近代的なものである。日系の外向杜貞の家も訪ねたが、日本の若い社員の住めそうもない立派なものである。つまり都市又は近郊農村の住居はまずまずで、ただ前に述べた農業使用人の住居は昔の貧農といわれた時代を彷彿たらしめる。住居で特徴的なのは便所である。農村では家屋内にあることはほとんどない。母屋の外20～50米の所に作り、深さ2米、巾1米の穴を掘り、その上に便器を仮設し、たまればそれを埋めて移動する。私は農家で宿泊しなかったが、ある人の話では夜間便意をもよおせばどこか戸外で適当にやってくれといわれたとのことである。また人肥は肥料に使わない。それもその筈、開拓した所では少くとも5年、甚だしい所は30年も肥料を用いなくともいいという話も聞かされた。

ブラジルの生活で最も興味深いのは人種的偏見のないことで、憲法でも人種差別は禁止されている。といってもアメリカ合衆国のように人種差別は禁止されているが、その偏見は未だに強く私自身もその実態を見て知っている。永い間ブラジル産業を支えてきたアフリカからの奴隷の輸入は1850年より廃止され、1888年全奴隷が開放された。それより100年



屋外の便所（養鶏業室井氏宅）

近い歳月が流れ、人種の垣塙ともいわれたこの国では、あらゆる場所、あらゆる生活面でも人種差別の片鱗はみられない。私ども旅行者にとってまことに気持ちのいいものである。人種構成は白人（ポルトガルを主としたラテン系）、61.8%、褐色人（奴隷として輸入されたアフリカ黒人、インデオと白人の混血）、26.6%、黒人11.0%、黄色人（ほとんど日本人）、0.7%の割合になっている。

生活面で興味深いのは結婚である。人種的偏見はみられないが、この点からみると人種間の交流は少なく、とくに白色人種、黄色人種（日系）は著しい。ここに参考のためアルヴ

夫婦の人種組合せ

夫 \ 妻	実 数					%					
	白 色	黄 色	褐 色	黒 色	不 明	計	白 色	黄 色	褐 色	黒 色	不 明
白色	1,235	9	56	5	3	1,308	97.0	2.2	32.0	11.1	100
黄色	1	394	1	1		397	0.1	97.8	0.6	2.2	
褐色	28		114	15		157	2.2		65.1	33.3	
黒色	4		4	24		32	0.3		2.3	53.3	
不明	5					5	0.4				
計	1,273	403	175	45	3	1,899	100	100	100	100	100

アレックス・マツシヤードの公証人登記所の資料を通して眺めてみる。

日系内部の結婚は農村では今なお本人の自由意志によることは稀で、仲人と両親の相談によって成立することが多い。ただし都会では自由に自分の配偶者を求めて結婚する。最近都会で高い教育を受けたものは、上層のブラジル婦人と結婚する場合が多い。例えば、サンパウロ州立大学医学部を卒業した日系人のほぼ50%は、白色人の良家の女性と結婚している。

このように日系の人達の社会的地位が向上すればする程婚姻の面でも白色人種ととけ合っただけのような気がする。

以上は一応生活の上での一端を述べたにすぎないが、日系の人達の断片が知ることができよう。

教 育

先進国と呼ばれている国は、経済的にも文化的にも高い水準にある。古い話で恐縮だが戦争に敗れて私は赤道直下の孤島からアメリカのLSTで故国に送還されたときのことである。輸送は海兵隊の連中であつた。日本までの永旅で向うの兵隊と親しくなり、話し合ったりしていたが、お前の名前はとうとうのかと問うとはっきり答える。さてスペルで書いてみるとうとうと書けない。戦争に負けて、こんな字も書けない連中にやられたと思うと味けなくなつた。ここで気がついたことはアメリカでも文盲がいるということである。世界のいわゆる途上国を廻ってみたが驚くのは文盲の多いことである。50~80%に及ぶ。わが国では江戸時代寺小屋があつた。当時では男が65%、女は45%は読み書きができたさうである。だからその頃から以来日本の教育は世界でも普遍していた国の一つではなからうか。ことに大学の進学率は現在同年令の40%とアメリカ、カナダと並んで世界最高である。ヨーロッパの先進国は15%で止っている。

さて話はブラジルにもどる。私の一つの目

的はこの国の教育制度をみることにあつた。行事やら方々の視察で日程がとれずほんの瞥見程度であつたが書き連ねることとする。

従来義務教育は7才から14才までになつていた。すなわち初等教育は4~5年、中等教育4年、高等教育（日本とは意味がちがう）は文理科に分れて3年、大学教育は3~6年となつていた。しかし1972年より義務教育は初等、中等合わせて8年制に統一されている。1970年の統計によれば、大学数64校、学生数56万人で、人口の略同様のわが国では大学数は短大専を含めて約1,000、学生数は200万人、学生数では約1/4といえる。このようにブラジルでは文教政策に力を注いでいるが、1970年の国勢調査によると15才以上の人口中に占める文盲の割合は33%で、これに対し1980年までにこれを零とする文盲撲滅運動を展開している。その為に1973年の文教予算は歳出総額の6.4%を占め、国防、運輸、社会保障費について第4位であり、教育に対する努力がみられる。ちなみに国の文教予算をみると一般会計予算に対して10.55%（53年度予算）でブラジルに比すれば高率である。

私は広く見聞する機会もなかつたがサンパウロの学園都市といわれるサンパウロ大学を見学した。もちろん一廻りであつたが、幸に医学部解剖学の日系のヨネダ教授の案内によつてみせてもらった。この大学はブラジルで最も古く、いわゆる名門校である。限りなく広い丘陵地帯に各学部を集中し、遙か彼方に市街の高層建築が望める。面積もゆうに100万坪を超えている。そのキャンパスに余裕をもって専門の分野が配置され、教育施設として完璧ともいえる。ヨネダ教授の担当する解剖学教室は一つのブロックに微生物、寄生虫の講座があり、基礎医学も数ブロックに分かれている。見て廻り、また話を聞きつつ感じたことは、わが国に比べてかなり遅れているように思われた。次いでブラントン毒蛇研究所の血清学部門を訪れた。ここでは蛇の飼育

場をみたが、群あう蛇がとぐろを巻いて重なり合い、日向ぼっこをしているのが印象に残る。



ブラントン毒蛇研究所の蛇の飼育場)

ブラジルの毒蛇は広く分布している。蛇咬による致命率も多いと聞いている。その必然性からこのような大きな施設と研究、さらに治療血清の製造がこの研究所に要請されているわけである。私が渡航前、ブラジルに詳しい理学部の教官から注意を受けた。農村へ行くなら畑へ入るとき決して半ズボンではいけない。ここでこわいのは毒蛇、蚊、だにであり注意しろといわれ、その咬傷の数々の写真をみせてもらって、内心おぞけをふるっていた。しかし畑の中に入ってもみたが、幸にこれらの害敵におそわれなかった。大学病院を参観したが、病院だけはキャンパスと離れて市街にある。建設は相当古いものらしい。午後遅くなり、内部を詳細にみることも、教授連に会うこともできなかった。病院は新旧とりまぜ、どうも増設に増設を繰り返したもので、各専門によってブロックが別になり、とくに癩、結核病棟はかなり大きなものであり、この国の疾病の傾向もうかがわれる。また高い死亡率の一つに麻疹があるとのことで、ヨネダ教授の話によると一般住民では麻疹に対して免疫性がないためとのことで、このことは日本の江戸時代以前のわが国の死亡原因の多かった麻疹のことなどを想起せしめ

る。



サンパウロ大学病院前にて
左より今井行雄氏、ヨネダ教授、豊田、今井照英氏

大学入試に触れると、どこの国でも医学部は最難関であることは周知のことで、ここもご多聞にもれず最も競争率が高い。100名定員に対して1万名、つまり100倍、しかもそのうち20%は日系の子弟であり、人種の混在しているなかで日本人の血の流れの優秀さを証明するに足るもので、移住した人々の子弟の教育に対する熱情も私の思のうちにこみ上げる。ある日系コロニヤ(日系の集団居住地)、ここはサンパウロ州インダイヤツバ市(人口5万5千人)、サンパウロ市より東北100キロの標高620米の高原都市で、この日系コロニヤは350家族、1,600名で職業別で、資料によると世帯別で農業144、商業78、工業95、医師2、教師8、弁護士1などで、ブラジルで最も上級職業といわれる医師、教師、弁護士もみられる。工業というものの多いのは、この都市に最大企業ヤンマー社が進出し、しかもその関連工場も多いためであろう。ことに市の収入源の50%、多いときは60%もヤンマー社の支出であり、ブラジルに対する日系企業の割合は大といわねばならない。またスザノ市(サンパウロ市東北約60キロ)に小松製作KKが進出し、私はこの工場を訪ねたが、10万坪の敷地に大工場を建設し、従業員800名をようし、ブルトーザー月産80台、しかも

多数の関連工場を有するとのことである。最近さらに拡張、生産の増強を計る由。



小松製作所工場（スザノ市）

ブラジル政府はアマゾン開発に対する意欲に燃え、リオ・デ・ジャネイロよりブラジリアへの首都の移転もその現れであり、今や5,500キロに及ぶTrans Amazonia（アマゾン横断道路）の完成もみられ、未開発のアマゾン原始密林の開拓に、これら日系企業の進出は将来性が極めて大なるものと期待されている。これについても教育面で工業技術に重点をおき、技術者の養成に力を注いでいる。

その反面、世界各国でみられる農業人口の減少の傾向はここでもみられる。日系の人々は、その子弟に対する高等教育の志向は高まっており、このことは必然的に日系コロニアの農業人口の減少につながり、そのたずさわる職業は何であろうとも、70年間の苦斗に満ちた開拓精神を二世、三世の人達も持ち続けたいと念願せざるをえない。

医 療

大都会は世界何れの国を問わず医療に事かない。しかしこれ以外の土地では恵まれていない。私は一体ブラジルでの医師数はどれだけかと尋ねた所 1,000人対 650人と答える。日本では 1,000人対 114名、これと比較すると6倍もの数である。余り不思議で再び問い質すと医療に従事するものという意味で、このうちに歯科医師、薬剤師、医療技術者、針

灸マッサージ師なども含まれているらしい。先に掲げたヨネダ教授に質しても正確な正規の医師数はわからないとの答である。大都市を離れた隔遠の地には医師はいない。主として薬剤師、針灸師、看護婦などで診療をまかっているらしい。社会保険はあるが開業している医師はこれを好まないで、どうしても私費治療になる。私は市内で開業している耳鼻咽喉科専門の日系のイマムラ氏を訪問した。その人の話では矢張り社会保険はほとんどあつかわれない。初診料は5,000円より10,000円、扁桃の手術は30万円ないし40万円（入院1日、全身麻酔料をも含めて）、日本の3～4倍ということになる。私は私宅を訪ねたが、豪壮な邸宅でプールが2つもある。



イマムラ氏邸にて

左よりイマムラ氏夫人（整形外科医）、イマムラ氏、豊田、中村氏（小松製作社員）

ブラジルでは医師が最高の生活を享受しているらしい。それなればこそ大学入試の志願者は100倍にもなる。また医学部の教授、助教授は市中で堂々と開業している。新聞広告にも載っていたので転載する。

こんなことは欧米ではありうることで、大学病院のなかで教授自身のプライベートの病床をもって、その病床の収入は教授個人のものになる。驚くにあたらないが、日本人的感覚からすれば驚きでもあり、私にとって或る意味で羨しい思いがした。

Prof. Dr. OSSAMU BUTUGAM
 Livre-Doente do Hospital
 das Clinica da Faculdade de
 Medicina da U. S. P.
 CLINICA E CIRURGIA DE OU-
 VIDOS, NARIZ e GARGANTA
 Consultório:
 Rua Teixeira da Silva, 34,
 9.º andar - conj. 92 TEL: 285-1394

耳鼻喉科
 クリニカ病院指導医
 医科大学教授
 医学博士

仏願治

診察時間 午後四時より
 七時まで
 出来れば前もって
 電話で御連絡下さい。
 電話 二八五・一三九四

DR. YOSHIO ENDO
 Av. Liberdade, 91-4º Andar
 Conjuntos 41-42-Sao Paulo
 Tel:35-9812

眼科専門
 聖市サンタ・カサ医大助教授
 医学博士

遠藤義雄

診察時間 午前10時—12時
 午後1時半—4時
 土、日曜日休診
 出来れば前もって
 電話で御連絡下さい。

衛生状態に眼を向けると、先ず開拓移住者のことである。移住者がその土地に適應するまで1年にかかる。風土的條件は主なものであるが、食生活、環境衛生、作業条件も加重され、身体變調とともにアレルギー疾患が多いとされる。ことに皮膚アレルギーで、いわゆる虫マケ、土マケといわれている。さらにアメーバ赤痢も時に致命的となる。アマゾンのある地区では1年間の罹患率41%という報告もある。また寄生虫の宝庫という人もおり、風土病も多い。私はサンパウロ市内で下肢の象皮病と考えられるものをみたが、恐らくフィラリヤによるものであろう。昨春東京で開催された国際シンポジウムでブラジルのポリツ医科大学から発表された顔面、口腔、鼻のライシュマニヤ、プラストミーシスの講演を聞き、その蔓延を知りえたが、熱帯性の疾患の多発がブラジル医学の重要課題と思われる。古い資料であるが日系コロニヤ 139名の40年間の死亡者44名の死亡原因の記載で心臓疾患7、老衰6、産婦人科疾患（主として産褥）5、癌5、チフス5、肺結核4、腎臓疾患4などという統計がみられる。ただ私の友人でアマゾン地方を廻ったとき、高血圧の案外少ないのに驚いたといっている。

近代化の進んでいるこの国では、医学医術の面で先進諸国に追いつくのも遠い将来では

ないだろう。私どもとしては、他の分野の技術協力とともに医療技術の協力をおしんではならないものと思う。

附 言

ところ変れば品変るだが、国際的にはマナーがある。日本の宿屋の感覚では外国のホテルでは通用しない。かつて私は若い教室の諸君と東京のあるホテルに宿泊、食事をとりに食堂に入ろうとすると、ボーイに呼び止められた。その注意はネクタイをつけてこいとのことである。幸い私はネクタイをつけていてよかったが、若い彼はノータイ。そのためかホテルにはネクタイが備えてあって、それを借りて間に合った苦い経験がある。

今度の旅行で、ホテルの廊下をスリッパで歩いて注意された人があった。そのため添乗のエージェントと口論になりかけていたのを見た。諸外国、とくに欧米ではマナーがきびしい。日本人だけならいいが、外国人も多く宿泊している。閉された個室であれば、何をしてもかまわないが、廊下は公の街路である。ホテルはヤドヤと違ってすべて洋式、つまり欧米風の習慣で運営されている。靴を脱げば裸と同然の感覚である。とくに女性は靴を脱ぐことはSEXを意味する。ブラジルのホテルはヨーロッパ様式のようなのである。その習慣に従って注意されたのであろう。欧米のホテルに浴衣が備えてないのも首肯ける。この点は東南アジアとは違う。東南アジアでは日本人観光客のため敢て日本化しているきらいもあり、観光資源獲得のため無理はないと思うが、私どもは旅行する以上国際的習慣に従わねばならない。それも日本では自ら知識階級と自負している人だからなおおきれる。私はそのやりとりを傍観していて恥ずかしい思いがした。

こんなことは余り言いたくなかったが、これからも海外に出かけられる人達もあるだろう。老婆心ながらあえて苦言を呈して筆をおく。

なお今回のブラジル渡航に際し、御配慮と御援助をいただいた富山県厚生連、富山県農村医学研究会と厚意をもって行を共にした皆さんに厚く感謝する。

引用した主な文献

- 1) 移民、ブラジル移民の実態調査：古今書院 1957年
- 2) ラテン・アメリカ事典：ラテン・アメリカ協会 1974年
- 3) ブラジルの日本人：丸善株式会社 1960年
- 4) ブラジルの現実—その政治、経済、社会—：ラテンアメリカ協会 1977年
- 5) ブラジル移住60年—ブラジル日系社会の研究：ラテン・アメリカ協会 1969年
- 6) ラテン・アメリカの農業開発：ラテン・アメリカ協会 1969年
- 7) ブラジル経済一問一答：ラテン・アメリカ協会 1973年
- 8) Economies and Societies in Latin America：P.R.Odell, JOHN WILLY & SONS LTD, London 1972年
- 9) 富山県のブラジル移民に関する資料
- 10) サンパウロ新聞、バリウスタ新聞、日伯毎日新聞：1977年
- 11) 未来の国をたずねて：高平公友 1977年
- 12) 再度アマゾンを訪ねて：和泉昇次郎 1977年
- 13) アマゾンのかゆい虫たち：里見信生、モンキー135号 1976年